# Honesty is the best policy.（正直が一番）

校長 笠 原　究

附属小では4週間にわたる教育実習が終了しました。各クラスに1，2名の教育実習生が入り、子どもたちと勉強したり、遊んだりしてくれました。子どもたちからは、実習生の先生がいなくて寂しい、という声をよく聞きます。現役の先生方と比べればもちろんいろんな意味で未熟な実習生ですが、それでも誠実に、正直に子供と向き合っておりました。その誠実さが子どもたちにも伝わったのだと思います。ここで実習を終えた学生の多くが、採用試験を受験して教師となる道を歩んでくれることを願っています。

英語には”Honesty is the best policy.”（正直が一番）ということわざがあります。その一方で、「正直者が馬鹿を見る」に当たる表現として”Honest doesn’t always pay.“（正直者がいつも報われるわけではない）、”Honest people pull the short straw.” （正直者は外れくじを引く）、”Nice people finish last.” （いい人はビリになる）、などの表現があります。確かに、あまりに正直にふるまうと場の雰囲気を壊したり、損な役回りを押し付けられたりすることもありますね。

ここで「究極の正直さ」を発揮したことで大成功を収めたユリウス・カエサルの例をご紹介しましょう。カエサルの「賽は投げられた」という言葉はお聞きになったことがあるかと思います。しかし、これがなぜ2千年の後にも残る名言になったのかはよくわからない方が多いのではないでしょうか。「ローマ帝国が生んだ唯一の天才」と評されるカエサルは、軍事、政治、文筆業などで優れた業績を残し、帝政ローマの基礎を築いた人物です。40歳になるまではあまりぱっとしなかったのですが、40を超えてローマの最高指導者である執政官に選ばれ、頭角を現します。 当時のローマは元老院の多数の議員が物事を決める共和制を取っていましたが、カエサルは巨大になったローマのかじ取りには共和制では対応できないため、一人の強力なリーダーを置く帝政を構想していました。これを危険視した元老院は、カエサルを当時は未開の地であったガリア（現在のフランス）へと追いやってしまいます。

カエサルは軍を率いてガリアの諸部族を従え、とうとうガリア全体を平定してしまいます。元老院はカエサルに、武装解除をして当時のローマ国境であるルビコン川を越え、ローマに戻ってくるように命じます。武装解除してローマに戻ればおそらくは拘束されるか、最悪の場合は殺されてしまうでしょう。しかし軍を率いてローマに戻れば国家反逆罪という罪に問われてしまいます。悩んだカエサルはルビコン川を前にあたりをうろつきます。そこで賭博場から例の”The die is cast.” （賽（＝サイコロ）はなげられた）という言葉を聞いたと言われています（諸説あります）。その翌日、カエサルは全軍を前にして、次の演説を行いました。「ここ（＝ルビ

コン川）を渡れば世界（＝ローマ）の破滅。渡らざればわが身の破滅。賽は投げられた」と言って全軍を率いてローマに進軍し、当時の指導者ポンペイウスをローマから追い出してしまいます。

カエサルのすごいところは、ここで正直に自分の本音を語ったところです。「ここをお前たちと渡れば戦火でローマはひどいことになるが、渡らないと俺が殺されるんだ」ということですね。普通の政治家であれば逆のことを言うでしょう。「世界を救うためにローマへ進軍しよう」といったようなことです。軍人たちがこの言葉を聞いて伴に進軍したのは、もちろんそれまで苦楽をともして戦ったカエサルへの信頼があったからでしょう。しかし、「賽は投げられた」に込められたすさまじいまでの正直さに心を打たれたことも事実でしょう。

確かに、局面的な利益のためには正直さを犠牲にしてうまく立ち回ることも必要かもしれません。しかし長い局面で考えると、やはり人間の信頼というものは正直さの上に成り立っていると思います。附小の先生方はいつも誠実に子どもたちと向き合っています。 長い局面を考えているからこそ、時には子どもたちに厳しい指導も行います。短期間ではありましたが、教育実習生たちがその姿を見て、Honesty is the best policy. の意味するところを感じ取り、その誠実さを受け継いでいってくれることを願ってやみません。